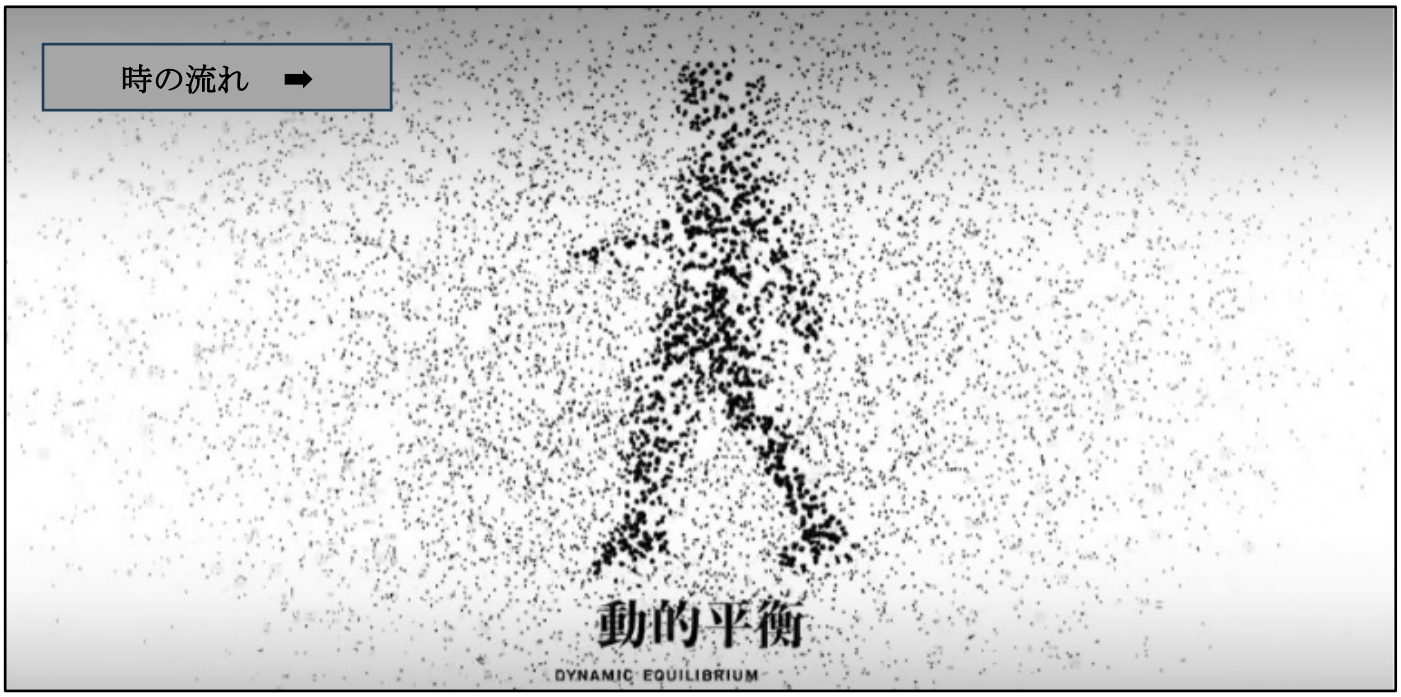
2024 年 9 月号

Community & Friend

有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm



平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 9 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

・・・・・・・・・・・・
すべての生物の活性は
良質なエネルギーに支えられている。
自然と人間、
全存在をひとつの物質エネルギーの発露として、
とらえたとき、
「食」は「環境」そのものではないだろうか。
・・・・・・・・・・・・
30 年ほど前に書いた会社案内の冒頭に出てくる一部。

あれは何年頃だったか、会社を 1/4 に縮小した時だったから 2008 年かな、自然食品専門商社の故伊藤社長の文章に福岡伸一氏が登場していた。伊藤社長とは未だ馴染みが薄かった時期なので、どういう人を登場させているのだろうか、と興味を持った。

調べてみると、『動的平衡』『生物と無生物のあいだ』の著書があることが分かった。で、その 2 冊を読んだ。面白かった。しばらくすると、馴染む縁がやってきた。その企業の商談会が東京浅草であり、当社も出展していた。いつものことだが少しいいホテルに泊まっていた。朝食会場に行き、空席を見つけると偶然伊藤社長が横のテーブルにいた。席に着くなりパンを頬張りながら、『動的平衡』の一説、”砂上の楼閣” の項の話しを切り出した。すると、すぐに伊藤社長は『ゆく川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず』と返してくれた。『鴨長明、方丈記ですね』と言うと、にっこりした顔が戻ってきた。間髪入れずに『色不異空　空不異色　色即是空　空即是色と同じですね』と言うと、『ホォーッ』という顔になった。出会いのすれ違いから互いに疎遠にしてきたが、出会う場所があった。

人付き合いというのは面白いものだと思う。互いの場所からわざわざ相手の場所に行こうとはしない。何もそんなに頑なになる事はないのだが、変に相手の場所に行くと、へつらっているような感じがして、相手に自分の居場所が見えなくなってしまう。

本当に出会いたければ、忘れたふりして待っていると、必ずその機会はやってくる。やって来なければそれまでの縁ということになる。互いのその居場所は分かり、携帯電話で直接やり取りをするようになり、その出会いが実りに向かい始めたとき、何故か伊藤社長はこの世の生を終えてしまった。だけど、直接会ってはいないがこの福岡伸一という人物には、それなりの実りを持った出会いとなっている。

Where is my "KOKORO" located in the body?

Nowhere in the body.

Just an energy,

That comes from outside.

Goes through all over the body, and exits.

これは、『こころはどこにあるか』というテーマについて英語で表現したくなり、教えをもらって仕上げた時の一節だが、実はこれは心だけではなく、身体そのものも同じように、外からやってくるエネルギーが身体に入って、一定期間遺伝子に順ったそれぞれの形を成し、また身体の外に出ていくという循環の中にあることに気づかせてくれた。

おそらく真理という事実は変わらないが、その表現は沢山あると思う。たくさんあると云うのは、それが現象を伴って初めて真理と言えるからだ。その現象は動きの法則性に過ぎない。法則性ということには構造的な因果関係が其処に潜んでいるに違いない。農業は、その法則性を因果関係とともに見出し、その作物の手助けを出来るかどうかを農家のうで、あるいは技術と呼んでいる。農作物の細胞がどの程度の期間で壊れては再生しているのか知らない。想像しても分からない。ただ、水分を吸って、水分を吐き出している事は分かる。この吸わせる水分に栄養素を組み入れ、吐き出させる水分に過剰な物質を混ぜて作物は出しているようにも思う。そして、その水分をも亦吸い上げている。これを農業の世界では「リーチング」というらしい。

翻って動物は、人間は、どうなのだろう。比べれば寿命は遥かに長い。そうか、人間より寿命が長い植物、つまり樹木は明らかに、この破壊と再生をやっている。

春に新芽を出した葉が、光合成という役割を遺伝子から与えられて全うし、秋に紅葉して落葉するのは、まさしくその通りだろう。樹が大きくなっていく時、その葉を出す枝も、その上にさらに伸びる枝が出てくれば、陽が当たらなくなり、葉を出さなくなり、やがて枯れて朽ちていく。枝葉末節というが幹を支える枝は、こうして更新という名のもとに破壊と再生を繰り返していく。

『動的』とは、この破壊と再生の動きという**時の流れ**を言っているのだろう。『平衡』とは、遺伝子に規制され外からやって来たエネルギーが一定の形になりながら更新を繰り返し、与えられた**機能を保つ状態**を言っているのかな、という理解をしている。

前頁の『砂上の楼閣』とは、波打ち際に砂で作った楼閣が、10 日後に行ってみても未だそのまま楼閣としてあり、だけどじっと砂のひと粒、ひと粒を見てみると 10 日前の砂とは替わっていたと福岡伸一は書いている。つまり、ゆく川の流れは変わらないけれど、その流れを形成している水は元の水ではないことの哀れに鴨長明は心を動かしたのだろう。これは、見た目は変わっていなくても、中身は替わっている。つまり変わっていないのは川の形であり、遺伝子の働きで、この scrap & build が生命で、その経緯経過を『時』と規定してもいいのじゃないかと思える。つまりその時を持っているか否かが、『生物と無生物のあいだ』に存在すると書いてあったような気がする。

しからば、空は色と異ならず、色も空と異ならず、色は同時に空だし、空も同時に色だとは、逆に見た目は替わっていても、中身は同じだと言いたがっているように思える。さすれば色となるか空となるかの『あいだ』は『何だ』って事になり、これは『摂理』の言葉が当てはめられるような気がする。遺伝子は解明に近づけても摂理は誰も物理法則以上に解明に近づこうとはしない。摂理の働きを纏めると原理の存在が発見され、その原理の結果を体系づけると法則という式が出来る。つまり陰陽の原理でこれを無双原理と呼び、先の伊藤さんが社長を務めた企業が、この原理を旨とした会社でムソー株式会社という。

有限会社アルファー　吉田清一郎